

変わる大学図書館

日本大学図書館 経学部分館長

金田 耕一 教授

(政治学)

昔も今も、そして将来も、教育研究機関としての大学には図書館がかならずあります。図書館のない大学なんて考えられません。しかし、大学図書館のあり方は時代とともに変わっていきます。

かつて図書館の第一の役割は、できるだけたくさんの本を収蔵することでした。本がまだ貴重なもので、特に海外の書籍や古い資料を手に入れることが難しかった時代には、多くの本が集積されている図書館は、教員が研究したり学生が勉強したりするためにはなくてはならないものでした。いまでも大学図書館はその蔵書数で評価されることがあります。経済学部分館の蔵書数は約 43 万冊ですが、日本大学全体でみると約 530 万冊で、日本の大学では第 4 位（1 位は東大）です。

大学図書館のもうひとつの役割は、学生さんに勉強するための場所を提供することです。歴史と伝統を感じさせる重厚な図書館で、静かに黙々と本を読みノートをとっている学生たちの姿は、大学を象徴するものでした。

しかし、インターネットの発達によるメディア環境の変化とともに、図書館ではコンピュータをつかって情報を収集し、それをもとにして学習課題にとりくむ学生が増えました。また、ひとりで勉強するというよりも、グループで調べものをしたり、意見交換しながらプレゼンの準備をしたりすることもおおくりました。メディアルームやラーニングcommonsは、そのような環境を提供するものです。図書館は、以前のような息苦しいくらい静かな空間ではなくなったのです。とはいえ、閲覧室は以前と変わることはない空間ですが。

では、これから図書館はどのように変わってゆくのでしょうか。

これからの図書館の役割は、学生そして教員・職員のコミュニティをつくりだすことだと考えています。図書館にどんな本や資料を購入するのか、それらをどのように配置するのか、といったこと。話題の本を読んで話し合ったり、自分のお気に入りの本を紹介したり（たとえばPOPというかたちで）、映画の鑑賞会を開いたり、誰かを招いて話を聞いたり、といったこと。それを、学生主体で（もちろん教員と職員が協力して）おこなうことをつうじて、教室以外の、ゼミ以外の、サークル以外のコミュニティの一員になることです。

「サード・プレイス」という言葉をご存知でしょうか。アメリカの社会学者オルデンバーグがつかった言葉です。「第一の場所」は家庭、「第二の場所」は職場（学生の場合は大学）、そして「第三の場所」は無料（あるいは安価）で、人びとが習慣的に集まり、フレンドリーで居心地の良い場所。いろいろな人を受け入れ、会話をたのしみ、「第二の家」のように寛げる場所です。

これからの図書館は、大学のなかの「サード・プレイス」であってほしいし、そのようになると思っています。図書館は勉学の場所であると同時に、義務的な勉学から離れて、本や映画と出会い、古い友人・新しい友人と出会い、さまざまな刺激をうけ、気持ちよい時間をすごせる場所となるはずです。

図書館を利用する皆さんには、あたらしいスタイルの図書館をつくりあげることには協力してほしい

と思っています。こんな本をおいてほしい、こんな映画を見たい、こんな集まりをもちたい、こんな話を聞きたい。なんでもいいですからどんどん意見をだしてください。そして図書館という場を一緒に楽しみましょう。